
「第3回特発性心室細動研究会」特集号の発行にあたって

特発性心室細動研究会(J-IVFS)代表幹事 平岡昌和
(東京医科歯科大学名誉教授・厚生労働省労働保険審査会委員)

Brugada症候群を含む特発性心室細動は、一見健常な個人に突発する致死的不整脈であるところから、その成因の解明、治療法や心事故の予知・予防法等の解明が一刻も早く望まれる病態である。最近では、この病態がかなり広く知れわたってきていることもあって、定期健康診断などにおいても、類似の心電図所見が検出され、その対処に苦慮することも多い。特発性心室細動研究会(J-IVFS)では、Brugada症候群ないしは類似の病態に関する全国的な規模での研究会を立ち上げ、情報の交換と本病態の解明を目指して平成14年から活動を行ってきており、その症例の蓄積も200例を超すものとなっている。これらの症例から得られた知見、ならびに年1度開催される本研究発表会での成果により、日本における本症候群の特徴も少しずつ明らかにされつつある。平成17年2月に開催された第3回特発性心室細動研究会では、「無症候性Brugada症候群に関する症例」と、「Brugada症候群における日内・日差変動」をテーマとして取り上げて、それぞれの問題について発表と討議を行った。「無症候性Brugada症候群に関する症例」においては、初回発作が突然死という不幸な転機となる症例の特徴や臨床像から、突然死の予知につながる情報の解明を期待し、「Brugada症候群における日内・日差変動」のテーマにおいては、主に心電図所見の日内・日差変動をもたらす特徴、機序などを理解することにより、より正確な診断、治療法の判定、予後予測などに有益な情報が得られることを目的として討議が行われた。これまでの成果に加えて新たに本研究会での成績が、日本心電学会誌「心電図」の特集号として掲載されることにより、研究会に参加されなかった方々にもその内容が周知され、少しでも臨床の場にフィードバックされることを祈念するものである。また、本研究会から全国の各医療機関に依頼している患者登録も徐々にではあるが確実に増加してきており、これらの調査研究の集積が特発性心室細動の病態解決に資することが期待される。

平成17年9月